



TITLE:

支那近代工業の性格

AUTHOR(S):

菊田, 太郎

CITATION:

菊田, 太郎. 支那近代工業の性格. 東亞經濟論叢 1941, 1(4): 970-988

ISSUE DATE:

1941-12

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/128676>

RIGHT:

所究研濟經亞東 學大部國帝都京經

年四回(二月、五月、八月、十一月)發行

叢論濟經亞東

號四第 卷壹第

月二十年六十和昭

- | | |
|-----------------------|-------------|
| 支那の田賦整理と土地陳報…………… | 經濟學博士 八木芳之助 |
| 佛印に於ける信用と其の性格…………… | 經濟學博士 松岡孝兒 |
| 英米外匯平準基金の對法幣政策…………… | 十龜盛次 |
| 中晚唐時代に於ける燉煌地方…………… | 文學博士 那波利貞 |
| 佛教寺院の礎礎經營に就きて…………… | 文學博士 笠原伸二 |
| 古來支那に於ける社會政策の…………… | 經濟學士 岡倉伯士 |
| 經費に就きて…………… | 經濟學士 西藤雅夫 |
| 滿洲合作運動の發展と交易場の歸趨…………… | 經濟學士 穗積文雄 |
| 華人紡績の經營に於ける問題…………… | 經濟學士 岡部利良 |
| 宋代貨幣攷…………… | 經濟學士 菊田太郎 |
| 支那紡績勞働請負制度の發達…………… | |
| 支那近代工業の性格…………… | |

(纂輯)

賣發閣斐有肆書

支那近代工業の性格

菊 田 太 郎

一 序 言

支那に於ける近代工業の歴史は、我が國に比較して決して新しいとは云へず、近代工業發達に必要な多くの條件、例へば、大なる需要、豊富な原料資源、多數の勞働人口も、備はつてゐる。しかも、支那に近代工業が眞に成立してゐるか、また、將來支那が工業國たり得るや否やは、近代國家であつたか否かと云ふ事と共に、一個の問題として充分に成立し得る。蓋し、支那の近代工業が、他國のそれからは直に類推するを得ない、多くの顯著な特徴を有するからである。

支那の近代工業が、一般或は他國のそれと異なる特徴は、他の或は他國の工業との關係、及び、工業の內在的性質、この兩面に就いて、相當顯著に認められる。即ち、先づ、前の面から見ると、産業革命が進行し、大規模の工場制工業が發展すれば、手工業・家内工業・マニファクチュア等の分野は、著しく縮小する筈であるに拘らず、支那に於いては、これら形態による工業が、依然廣汎に存在し、中々に有力であり、他方、支那の近代工業は、外國商品・外國系企業に對抗し、その進出を防止し、以て近代國家としての支那の經濟的な基礎たるに足る實力

を有しなかつた。次に、成立してゐる少數の近代工場も、單に外觀だけを見れば外國のそれと變らないに拘らず内部に於ける技術的・經濟的合理性が確立せず、興亡常なく、屢々操業を停止し、經營者を更へ、安んじて使用し得る製品を、合理的な價格で、繼續的に供給する例は、極めて少いのである。

支那近代工業のかゝる特徴は、如何なる理由に基くものであらうか。支那の産業革命が進行してゐない結果であるか、産業革命が進行してゐないのは、單なる時間的遅延であるか、それとも、支那に於いては進行を期待し得ないのか、或はまた、支那近代工業の特徴は、支那特有の事情に基き、従つて、短い時間では變更し得ない一種の性格なのであらうか。右の問に對し、明瞭に答へることは、中々困難であつて、從來、(一)多種多様な具體的事實の列擧による説明、(二)支那の植民地説、(三)産業革命未進行説、(四)封建社會説、(五)支那人の心理・性格、支那の文化・社會の特質による説明などが、對立してゐる。これら諸説明中、何れが最も合理的であり、また、基本的であらうか。

以上述べ來つた支那近代工業の特徴の解釋、或は、特徴に對する諸説明の吟味が、本稿の課題とする所である。順序として、先づ、支那工業特に近代工業の特徴を見、その上で、解釋乃至説明の問題に進みたいと思ふ。事の性質上徹底的な究明は、勿論至難であるが、問題を幾分でも整理・展開し得れば、幸甚である。

二 支那工業特に近代工業の特徴

支那の工業乃至近代工業の有する特徴の的確な叙述には、甚だしい困難が伴ふ。蓋し、各種の性質を持つ工業

が雜然と存在し、盛衰常ならざることが、正に重要な一特徴をなす上に、基礎たるべき具體的な資料は、一部の地域一部の工業についてしか得られないからである。併し、方顯廷の Industrial organisation in China (Nankai Social and Econ. Quarterly, Vol. IX, pp. 919—1006, 1937. 岡崎氏譯、支那工業組織論)、R. H. Tawney: Land and labour in China, 1932. (浦松・牛場兩氏譯、支那の農業と工業)、Edit. by H. G. W. Woodhead; The China Year Book (中華年鑑), 1938, Chapl. XXVIII, 支那の近代工業、尾崎五郎氏、支那の工業機構、王子建・王鎮中、七廠華商紗商調査報告(國立中央研究院社會科學研究所、叢刊、第七種、國松氏譯、支那紡績業)の叙述を綜合すれば、大體次の如くなる。

(一) 近代工業が、一部の地域、特に外國との接觸の多い港市に、著しく局限されてゐること。この事實は、屢々注意されて居り、例へばトーナーは大體次の如く云ふ。¹⁾「近代工業は一定地域のみ限定されてゐる。工業國としての支那は、沿海地方、鐵道又は河川の便宜を有する内地、及び、奥地、この三大地域に分れる。沿海地域に於てはもと／＼外國からの輸入ではあるが、産業資本主義が大きな重要さを——時としては絶大なる重要性さへ——持つてゐる。第二の内地に於いては、産業資本主義は、漸く起り掛けてゐる所である。第三の奥地は、最も廣い地域であつて、此處にも、遠隔からの影響が、次第に強く感ぜられるやうになつてはゐるが、産業資本主義は、まだ、大地に根を下し、獨自の生活を持つ一地方勢力として、成立するには至つてゐない」と。沿海地方の工業が、トーナーの云ふやうな意義の擔ひ手であるか否か、後に考察すべき問題であるが、質的にまた量的に、支那近代工業の大部分を構成してゐたことは、明瞭で疑を容れぬ事實である。

1) 譯本、一三七頁以下。

中華年鑑²⁾の筆者も、同様に、港市特に上海に於ける集中を、支那工業の一大特徴とし、事變以來の工業の奥地移動乃至建設が、永續的な傾向となるか、單に一時的な現象に止まるか、遽に逆踏し得ないとしてゐる。

(二) 製造工業、輕工業、特に纖維工業が卓越し、一般に資本の有機的構成が低いこと。前の點については、やはり、トーネー及び中華年鑑の叙述が要を得てゐる。即ち、トーネーは云ふ³⁾。「産業革命の初期に多くの國が經驗したやうに、最も急激に發達した産業は、製造工業であつて、鑛業ではなかつた。西洋諸國の標準からすれば、現在の支那に於ける採鑛冶金業は微々たるものである。一九二八年に於ける支那の石炭產出高は、英國の約十分の一であつた。……鐵鋼業は更に發達が遅れ、……不況と國內動亂に災され、一九二八年には四製鐵所しか操業してゐなかつた。」「近代化は、製造工業、就中纖維工業に於いて、最もよく行はれてゐるのであるが、これとても未だ初期の段階を脱してゐない。」

同様の事實を、中華年鑑に於ける筆者は、大體次のやうに云ふ⁴⁾。「過去七十餘年間の支那近代工業發展の跡を辿るとき、我々の注意を惹く一事實は、鐵鋼・造船・機械製作など重工業の發展が少く、綿紡織・製絲・絹織物・羊毛・製粉・燐寸・護謨・皮革など、輕工業部門が卓越してゐることである。近代工業中、先づ移植された部門は、軍器製造・造船など、國防を目的とする重工業であつたに拘らず、今世紀に入り、純經濟的な考慮が主な動因たるに至つて、衣食を供給する綿紡織・製粉を始め、消費財部門が中心たるに至つた。中でも、纖維工業は、最近の調査によれば、資本額・労働者數・使用動力量・生産額の何れから見ても、支那全工場の約三分の一を占める。」

2) 五三五頁。
3) 五三三頁。
4) 五三七頁。

次に、一般に支那の近代工業に於ける資本の有機的組成の低いことは、工業の種類を観察から既に歸結し得る所であるが、支那工業中最も近代化してゐるとされてゐるとされる綿紡織工業さへ、この點に於いて如何に低いかは、方顯廷の調査による次の數値⁵⁾から、直ちに理解することが出来る。

第一表 資本の有機的組成に於ける支那人紡織工場と日本人工場との差

	總 體		支 那 人 工 場		日 本 人 工 場	
	實 數	比 率	實 數	比 率	實 數	比 率
資本及び積立金	二七五、八二八、一三八	一〇〇・〇	一二六、九〇八、二二二	四六・〇	一四八、九一九、九一六	五四・〇
紡 錘	二五三、二八二、七八三	一〇〇・〇	一一七、五一八、五〇六	四六・四	一三五、七六四、二七七	五三・六
織 機	二二、五四五、三五五	一〇〇・〇	九、三八九、七一六	四一・六	一三、一五五、六三九	五八・四
勞 働 者 數	二三九、〇三一	一〇〇・〇	一六一、九四九	六七・八	七七、〇八二	三二・二
原棉消費量(擔)	八、二八六、六九三	一〇〇・〇	五、三一〇、六九三	六四・一	二、九七六、〇〇〇	三五・九

(三) 經營規模小なること。トローネーは、東部沿海地方、揚子江下流地方、滿洲に於ける二九都市に關する調査の結果たる General statistics of factories in China を資料として、支那に大工場が少ないことについて、大體次のやうに云ふ。⁶⁾ 右統計によれば、上述諸都市の「工場數は、一九二〇―三〇年に三倍に増加したと、並に、この報告書に使用された工場なる言葉の意義は、甚だ廣範圍のもつであるが、しかもなほ、工場數が驚くべき程度に少いこと、この二事實が知られる。」「この官廳統計に云ふ所の工場中には、紡績工場のやうに二千人以上も

の労働者を使用する大經營から、極く小さな經營までが含まれてゐる。従つて、工場數が既に少い上に、西洋諸

5) 尾崎氏、支那の工業機構、一三六頁に據り、比率は改算。

6) 譯本、一三四頁以下。

國で使はれてゐるやうな意味に於いての大規模生産は、更に遙かに少い。大規模生産の行はれつゝある主な工業は、石炭・鐵鋼・木棉・製粉・製油・燐寸・石鹼・電力等で、他種の工業にも若干の新式經營はあらうが、技術上・經濟上充分近代化され、工場と云ひ得るものの總數は、恐らく二、五〇〇—三、〇〇〇を超えないであらう。將來に關する見解はどうあらうと、支那に於ける産業革命は現在の所、約六個の都市を除けば、やつとその緒に着きかけた許りであると云ふことには、異論がなからう。」

また、方顯廷は、支那工業の全體に通ずる特徴として、組織の缺如、換言すれば、手工業・家内工業・工場制工業等の雜然たる存在、及び、經營の小規模なことを擧げ、後の點について次のやうにいふ。⁷⁾「操業が小規模なことは、支那工業組織の第二の特徴をなしてゐる。歐米の標準でかなり大規模と見られる工業は、その外には全然經營の仕方がない工業のみで、理論上大規模にも小規模にも經營し得るやうな事業は、總べて、小規模に行はれる。かなり大規模に經營されてゐるのは、綿絲紡績・毛絲紡績・鐵鋼・造船・製粉・製糖・セメント製造・動力生産、小規模なのは、製絲・絹織・綿織・メリヤス・燐寸・印刷・機械製作・紙卷煙草の諸工業である。」

(四) 經營・企業の内部に於ける合理性の缺如。以上述べたやうに、支那の近代工業が地域的に、また、事業の種類に於いて、著しく局限されてゐる外、存在する少數の近代工場も、經營として或は企業として、その内部に充分の合理性を有しない。かゝる合理性の缺如は、經營・企業の實際の運營、製品の質・量については、簡単に叙述することが不能であるが、生産費或は收支狀態に極めて明瞭に現はれる。

例として、支那工業中最も近代化せる綿絲紡績工場を採り、先づ、支那人工場と日本人工場との生産費を比較

するに、支那人工場は衛生設備を除くあらゆる項目について支出が多く、結局生産費に於いて日本人工場の二倍⁸⁾

第二表 在支紡織工場二〇番手粗糸生産費比較表(單位元)

支出項目	支那人工場	日本人工場	支那人工場の支出超過
工場費	一〇・五〇	五・八〇	四・七〇
労働力賃	五・五〇	四・八〇	〇・七〇
動力	一・八〇	〇・六〇	一・二〇
機械修理	〇・四〇	〇・四〇	—
その他の修理	一・七〇	〇・五〇	一・二〇
消耗品	一・五〇	〇・二〇	〇・三〇
包料	一・二〇	〇・六〇	〇・六〇
職員給料	一・五〇	〇・五〇	一・〇〇
その他雑費	〇・三〇	〇・五〇	—
衛生設備	二四・四〇	一四・九〇	(一) 〇・二〇
小計	二四・四〇	一四・九〇	九・五〇
支出項目	支那人工場	日本人工場	支那人工場の支出超過
營業費	〇・二〇	〇・二〇	—
運費	二・五〇	二・〇〇	〇・五〇
營業費	一五・〇〇	二・七〇	一二・三〇
各種租税	〇・二〇	〇・一〇	〇・一〇
及保險費	一・五〇	〇・五〇	一・〇〇
其他雜費	一九・四〇	五・五〇	一三・九〇
小計	四三・八〇	二〇・四〇	二三・四〇
合計	四三・八〇	二〇・四〇	二三・四〇

以上となつてゐる。次に、支那人綿業の收支關係を見るに、天津B工場については第三表⁹⁾、七省綿紡織工場に關しては、第四表¹⁰⁾があり、利潤は極めて少く、屢々缺損の生じてゐることが知られる。天津その他の地域の綿業の生産費が、上海に比較して高いのは事實であるが、かゝる不合理な企業の数々存在することは、到底否定するを得ない。

- 8) 尾崎氏、支那の工業機構、一四三頁による。
 9) 方顯廷、支那の綿業(有澤氏編、支那工業論、三三一頁)による。
 10) 王子建、王鎮中、七省華商紗廠調查報告、二一七頁以下。國松氏譯、支那紡織業、二八八頁以下より作製。

第三表 天津B工場に於ける製品別收支(單位元)

生産費 販賣價格 損益	綿			(一 俵)	
	一〇番手	一四番手	一六番手	二〇番手三子	綿布(一反)
生産費	二〇八・五〇	一一一・二三	二四三・八二	二六八・八三	八・一三
販賣價格	二〇六・九五	一一三・二五	二三六・九八	二七四・九一	七・六〇
損益	(一) 一・五五	二・〇二	(一) 六・八四	六・〇八	(一) 〇・五三

第四表 七省華商紗廠に於ける收支(單位元)

生産費 最高價格 最低價格 平均價格	二〇番手綿絲(一俵)		一二封度細布(一疋)	
	生産費又は價格	生産費との比較	生産費又は價格	生産費との比較
最高價格	二二七・一七四	(+) 三・〇九六	九・一一八	(+) 一・八〇六
最低價格	二二〇・二七〇	(+) 三・〇九六	一〇・九二四	(+) 一・八〇六
平均價格	一九三・〇〇七	(一) 二四・一六七	七・八三二	(一) 一・二八六
	二〇六・六三八	(一) 一〇・五三六	九・三七八	(+) 〇・二六〇

右のやうに經營に不合理な點が多く、生産費が高く、收支狀態が悪いのは、既に述べた資本の有機組成の低いこと、經營・企業の小規模なこと、或る程度まで關聯してゐるが、そのみで完全に説明されるものでなく、經營・企業に當る人々の性格、經營・企業に對する處置の相違に基く點が多い。この點について、ラチモア¹¹⁾

支那近代工業の性格

第一卷 九七七 第四號 二一七

11) Manchuria, p. 149, 160,

は大様次のやうに云ふ。「西洋人は、文化は民族によつて異なるにしても、文明は唯一つであり、世界の何處に於いても、工場は常に工場、鐵道は常に鐵道と考へ勝ちであるが、文化の相違、生活と文明に對する態度の差は、意想外に重要な影響を及ぼしてゐる。」支那では産業經營に當る「人々は、彼が何をなし得るかよりも、如何なる人であるかを見て選擇される傾があり、彼が代表する資本額よりも、彼の政治的地位・親族關係の方が、重要と考へられる。この仕組には、……多くの缺點があり、特に、産業を支配するのが、産業中で生活する人々でない上に、彼等の努力は、その生活關係並に各方面への顧慮によつて、著しく限定されてゐる。」換言すれば、産業經營が唯一最大の目的と見做されず、單に手段たるの地位しか認められない。「これが主な原因となつて、長期間を経て次第に發達した大規模經營は比較的少く、多くの企業は、規模は如何に大きくとも、斷續的に操業し、一般情勢の影響を受けること強く、投資の危険大きく、高利潤と早い回收を目ざすのであり、」「収益は、總べて利潤或は利子として企業外に流出し、機械の維持・修繕等に必要な支出が行はれず、……既設工場の適當な維持・管理よりも、新企業への投資が得策とされる。」

ラチモアの指摘してゐる經營・企業に對する態度の特質は、決算狀態に最も明瞭に認められる。例へば、方顯廷は天津の四紡績工場につき次の如く記述してゐる。¹²⁾「A工場は十年の内五年、B工場は九年の内四年、C工場は十年の内一年、D工場は九年の内三年は、缺損である。一九二三年より前には、この四工場は何れも利益を擧げたが、利益金の處分は、工場の將來を殆んど顧慮せずに行はれた。即ち、第一に、剩餘準備金の最高は、一九二一年のA工場の三・五一%に過ぎず、この小額の準備金は、損失の年に直ちに使用される。第二の不健全な償

12) 方，支那の綿業（有澤氏編，支那工業論，三〇五頁）。

行は、損失の年にさへ配當すること、二工場ではこれを常習的に行つてゐる。第三に、減價償却準備金は、利益のあつた年のみに行はれ、しかもその額は非常に少く、最低限度たる固定資本の五%を超えることが殆んどない。第四に、固定資本投資が過大で、C工場を除けば、何れも拂込資本額より大きく、その結果として運轉資本が甚だ貧弱である。」

以上觀察した所の、(一) 地域的局限、(二) 輕工業が主で、資本の有機的組成が低いこと、(三) 小規模なること、(四) 經營・企業の内部に於ける不合理性を以て、支那近代工業の主要特徴と見做し得やう。屢々擧げられる他の特徴、例へば、國內の需要充足よりも、寧ろ輸出を重視すること、盛衰興亡常ならざること等は、何れも上記四特徴に當然伴ふ現象と解されるからである。

三 支那近代工業の特徴に對する解釋

支那の近代工業が示す所の、右に述べたやうな特徴は、單に一時的な性質に過ぎないか、それとも、相當長期に亘つて變化せしめ得ない性格であるか、また、これら特徴は何によつて如何に説明されるか。この間に對して從來相當多くの解答があるから、次にそれを吟味しやう。

(一) 多種多様な具體的事實の列擧による説明。この方法によるのは、方顯廷の「支那工業組織論」であつて彼はその所謂組織の缺如の理由としては、近代工業の發達の急激なりしこと、生存競争が激しいこと、ギルド及び家族制度の存續など、一般的な事情を擧げてゐるが、組織の缺如と經營の小規模性との共通理由としては、原

料に關する三種の困難（規格の缺如、運輸の困難、價格の不安定）、動力供給の特殊性（請負的な動力供給、不利な石炭供給事情）、建築物の不良、勞働力調達上の不利（熟練勞働者の缺如、勞働者供給の請負制度、不規則な雇傭）、販路の不確實、金融上の不便等々、個別的な各種事情を擧げてゐる。

この説明には、二個の大きな缺點がある。即ち第一に、彼の擧げる事情中には、近代工業自體が發達してゐないことに基くか、或はこれを有力な原因とするものが、原料の規格缺如、熟練勞働の不足、不規則な雇傭など、相當多數存在することである。第二に、彼の擧げてゐる多くの理由、例へば、ギルド及び家族制度の存続、原料の運輸の困難、その價格の不安定、販路の不安定等は、個々獨立の現象ではなくて、支那の社會・經濟の全體的な構造乃至性格の一表現であり、従つて、統一的な把握理解を要請する。従つて、かやうに各種事實を個別的に列擧するよりも、近代工業の發展の急激なりしこと、或は、支那の社會・經濟の特殊な性格等により、統一的に説明する方が、著しく學問的な態度と云へやう。

（二） 支那半植民地説、或は外國經濟の壓力による説明。支那に對する外國經濟の壓力が甚だ強く、原料の搬出、製品の供給、企業的進出等によつて、支那近代工業の發達がかなり阻止或は畸形化されたことは、或る程度承認せねばならぬ事實である。

併し、支那の近代工業が現に見るやうな特徴を有するのは、外國經濟の壓力のみによる結果でなく、支那人の性質、支那の社會・經濟に内在する事情に基くことを證する事實が、相當多數存在する。詳言すれば、第一に外國經濟の支那進出は、支那自體の態度による所が多い。支那には時に外國人や外國商品の排斥運動が生じたが、

以夷制夷的に或は裏面祕かに外國人・外國商品を利用してゐる場合が多く、また、支那の政府・商人・買辦・消費者等は、自國經濟を基礎から建設するよりも、外國の經濟的進出を利用する方が、簡単に勢力擴張・利潤獲得・利便享受を實現し得るとして、少からずこれを歡迎援助したのである。第二に、外國の經濟的進出は、支那近代工業の發達に少からざる刺激・援助を與へた。販路の開拓、技術の傳播、熟練労働の育成等がそれで、かかる刺激・援助を最も明瞭に立證するものは、支那近代工業の港市に於ける著しい集中である。第三に、外國經濟の壓力は、支那全土に同様に侵透した譯でなく、また、支那の國權回復、關稅自立、爲替關係等によつて、その強さは次第に減じた。然るに、外國經濟の壓力少き地域・時代に於いても、支那の近代工業が堅實に確固と發展したとは、殆んど考へ得ない。故に、半植民地說或は外國經濟の壓力による説明は、局部的・表面的であり、根本的な理由は、これを支那自體について求めねばならぬ。

(三) 産業革命未進行説。既述の支那近代工業の諸特徴は、産業革命が著しくは進行せず、未だ初期の段階にあることに基くとするとき、一舉に統一的に説明されるやに見える。併し、大規模工場制工業の發展・制覇は、産業革命の主要内容を構成するもの故、何故産業革命が未だ進行してゐないか、その理由を明かにしなければ、この説明は同語反覆となつて了ふ。

支那に産業革命が進行してゐない理由として、屢々近代産業の歴史の新しいこと、支那の領域が廣く、交通の不便なこと、外國の壓力等が挙げられる。今これら理由を吟味するに、第一の點については、トナーと共¹³⁾に、大體次の如く云ひ得る。「もし近代工業の發達を、機械及び動力の使用によつて測定するならば、百年以上に亘

13) 譯本、一三八/九頁。

る近代工業發達の歴史を持つのは、英國だけで、他の大部分の國では、その歴史は非常に短い。河は、必要な條件が備はつてゐるへすれば、一度氷が破れたとき、驚くべき速度で奔流する。獨逸は一九〇〇年には既に大工業國の一となつてゐた。……しかも、獨逸がこの地位に到達するに要した時間は、人間の一生よりは短い時間であつた。……日本がその工業の最も重要な部分を近代化したのは、僅かに三十年以内の事であつた。第二に對しては、支那が地形・河川・港灣の關係上、割合に國內交通に便利で物資輸送・商業取引が早く發達したこと、現在に於ける交通機關の未發達は主として産業革命未進行に基くこと、第三に對しては、前に(二)に述べたやうに單なる障礙でなく、促進援助の作用もあつたことを指摘すれば、既に充分であらう。従つて、支那に於ける近代工業七十餘年の歴史は、決して短いとは云へず、産業革命の進行してゐない理由は、支那近代工業の特徴のそれと共に、これを支那の社會・經濟の特質に求めねばならぬ。

(四) 封建社會説。支那の社會・經濟に於ける諸特殊性を統一的に説明せんとするものに、封建社會説がある。その説によるに、地代と高利の追及が搾取の形態であり、專制官僚―豪紳―地主―商人―高利貸は、屢々同一人たり、然らずとするも相互に密接な關係ある搾取階級を構成する。従つて、産業資本家の手中にあつて、産業資本として機能すべき株式資本までが、高利貸的な性質の資本として機能し、營業或は損益状態とは無關係に年々一定率の官利を受け、その上なほ利益があれば、紅利(その中には職員に對する賞與をも含む)の分配に預り、積立金・減價償却準備金等は殆んど残さない。これが支那の不合理な工業經營の最も基本的な理由であるとされてゐる。¹⁴⁾

14) 尾崎氏、支那の工業機構、一四四頁以下。

この説が、從來抽象的或は斷片的に取扱はれてゐた問題を實質的・統一的に取上げた意義は、充分に認めねばならぬが、解釋自體に對しては、第一、地代が剩餘價値の唯一或は最大の形態であつても、必ずしも封建社會ではないこと、第二、支那が封建社會であつたのは周或は唐迄で、以後は寧ろその否定の上に立つ官僚專制社會と見るべきことを指摘することが出来る。¹⁵⁾ 従つて、現代支那の經濟・社會の諸特徴を封建的な存在、或は封建的遺物なる名稱で呼ぶことは、無用の混雜・誤解を惹起する所以であり、支那の産業資本が高利貸資本的な性質を有するとすれば、あるがまゝに捕捉し、現在の諸事情によつて説明することが適當ではあるまいか。卑見を卒直に述べるならば、支那の專制官僚が封建的領主でなかつたことを一因に、清末の官營近代工業が失敗に終り、現在も封建的な團結・階級が存在しないため、長期間を目標とする永續的な産業の發展がかなり阻害されてゐるのでないかとさへ考へて居る。この點についての詳論は、かなりの紙面を要するので、別の機會に譲り、こゝには、支那工業の特徴の説明として、封建社會説の適當ならざることを、略言するに止める。

(五) 支那に於ける近代工業の諸特徴を、支那人の心理或は態度によつて説明するのは、トーネーとラチモアである。

トーネーは次のやうに云ふ。¹⁶⁾「近代産業の基礎をなすものは、物質的であると同時に、心理的でもある。……近代産業を形作るものは、結局に於いて、機械ではなく、これを利用する頭腦であり、その利用を可能ならしめる社會の機構である。近代産業は、發明家と同じ程度に、法律家にも負ふ所のある社會的產物である。これを機械仕掛の玩具と同一視し、社會狀態と無關係に、單に嗜好に任せて輸入し得る様に思ふことは、實に馬鹿げた幼稚である。」

15) 小竹文夫氏、現代支那社會論、東亞經濟論叢、第一卷第一號、六九頁以下

16) 參照。譯本、一四〇頁以下。

な考へ方である。」然らば、支那人の近代産業に對する態度如何と云ふに、それはかなり複雑であつて、「西洋の技術を單に一つの道具として採用するに止め、この技術の背後にある西洋思想の侵入には抵抗する。」

また、ラチモアは云ふ。¹⁷⁾「支那文明は、スペングラの云ふ意味に於いて、老熟したものである。かく古い文明の一特徴たる保守主義は、古來の物事を古來の仕方で行ふに止まらず、新しい物事をも出来れば古い仕方で行はうとする。」¹⁸⁾「滿洲は多くを西洋文化に負ふに拘らず、……西洋の方法による開發の目標は、古い標準による生活の向上にあり、開發・産業は、何れも、古い社會の烙印を押されてゐる。若い社會の特徴をなす、産業と共に成長し、これを指導する地位まで到達した人々は、甚だ少ない。反對に、新しい技術の使用を支配するのは、一般に、かゝる技術を理解せず、また理解しやうともしない人々である。彼等は利潤を重視するが、作業自體は從屬的な仕事として使用人に委ねる。そして、これこそが正に特徴的なのであるが、上記の如き扱ひ方を自然であり同時に正しいものと見做してゐる。」¹⁹⁾彼はまた次のやうにも云ふ。「西洋社會は、顯著な一特徴として、機械並にこれを扱ふ技術家を社會的に尊重する。……然るに、支那では、技術家は從屬的な地位しか認められない。企業者は技術や機械を理解しない許りでなく、これを尊重する氣持すら有しない。機械を利用はするが、その論理は尊重せず、飽くまで自己流に行はうとする。」

トーナーは、支那人の態度、産業の性質、何れについても變化の可能性を認めて、次のやうに云ふ。¹⁹⁾「社會制度は柔軟なものであり、習慣は變化するものである。事實、この兩者共に、過去三十年間に、支那に於いて、かなりの變化を示してゐる。」他方、支那文明にとつては外來の要素たる近代産業も、「支那の環境との接觸によつて

17) 前掲、七九頁、九六頁、一〇〇頁。

18) 一六五頁。

19) 譯本、一四〇頁。

變化し、新らしい内容を持つに至る。」かくして、彼は支那に於ける近代工業發展の可能性を全然否定はしないけれども、發展が確實であるとも斷定せず、極めて慎重に次のやうに云ふ。上記の如く支那の環境に「制限し馴致された資本主義産業が、果してその本來の經濟的特徴を失はすにゐるものかどうか、唯時のみがこれを示し得る。併し、次の如き豫言だけはなし得やう。即ち、外國から輸入され、支那式に變化せられた他の事物と同様、近代産業も、やはり全く支那式のものとなつて弘まるか、或は全然成功しないか、その何れかである。」

これに對して、ラチモアは、支那文明を老熟したものと見る立場から、西洋文明の攝取、産業發展の可能性を否定して、支那文明は「西洋文明と融合し得るものでなく、これに負けるか、その意味を失はせるか、換言すれば、これを征服するか、その何れかである」²⁰⁾とも、支那に於ける「西洋文化の發展は、適應とはならないで、在來文明の破壊、及び、これに對する交代となる。従つて、爲政者が西洋文化を採用しやうとしても、支那の民衆は、改革を勝利とは見ず、敗北と感じ、これを歡迎はしない」²¹⁾とも云つてゐる。かやうに、現状の解釋を異にし、將來への見透しまた同一ではないが、支那近代工業の特徴を支那人の心理或は態度によつて説明せんとする點では、その揆を一にする。

支那工業の多くの特徴が、一の統一ある全體として把握さるべきものであり、支那人のこれに對する態度により強く規定されてゐることは、上にも既に述べた通りである。従つて、トーネーやラチモアの云ふ所は充分首肯される。併しながら第一、かゝる心理や態度が、我々には不合理に感ぜられ、また、支那近代工業の正常な發展を阻害したにしても、支那自身の状況に適合した相當の合理性を有し、それ故にこそ最近まで存続したと解され

20) 七九頁。
21) 九六頁。

るから、何故に生じ、また、如何にして今日まで存続してゐるか、これを明かにしなければ充分な説明とは云へないであらう。ラチモアが老熟の所爲にしてゐるのは、一解釋ではあるが、何故老熟したかについては、やはり説明を必要とする。次に、この説明を追求すると、かゝる支那人の態度は、近代工業の性質と共に、支那の有する環境に根ざし、これに適合したものであることが知られる。

支那近代工業の性質、並に、これ同時に定まり、且つこれを規定してゐる支那人の性格、支那社會の特質の説明は、極めて困難な問題であるが、自分は大體次のやうに解釋乃至豫想してゐる。

先づ支那に於いては、地形・氣候・農業方式の關係上、人間の居住・耕作に適する地域は、一見考へられるほど廣からず、人口は平原・盆地など低地に著しく集中し、生活は甚しく困難である。次に、支那特に北支の自然即ち氣候・土壤・侵蝕堆積狀態等は、極めて不安定で、或は人間に有利とは云へぬ方向へかなり急激に變化し、然らずとするも、時による變動甚しく、生活・社會・經濟の發展に安固な基礎を供しない。更に、政治的・軍事的な動搖、特に北方諸民族の侵入が、重大な影響を及ぼした。

かやうな環境の下に於いて生存を維持し、社會を存続せしめる必要上、支那人の性格並に支那の文明に、二つの顯著な特質が生じた。即ち、その一は、人生の目的、努力の目標を、生物的に解しての生命の延長と子孫の増加とに、極端に集中したことである。その結果、科學のための科學、技術のための技術、長期間を單位として資本の増殖を期する經營の確立、迂回生産などの餘裕は、殆んど認められない。窮屈な上に急變する環境下に於いては、第一義的な目標に注意と努力を集中し、また、百年の長計を顧慮するよりは、時々刻々の變化に適應し、

これを利用することが、必要且つ適當だからである。その二は、社會的な觀念及び制度の發達である。經濟的な努力には、自然の征服、技術の發達を基礎とする富の生産増加、人間相互間換言すれば社會的な關係の調節による富の平均的な分配、この二方向が存在する。所が、支那では自然的・社會的な環境が急激に變化し、前の方
向に對する努力が早く限界に到達し終るために、努力は専ら後の方向に傾注され、その結果、並列關係に立つ
多數の人口・家族・村落を支持し得たけれども、技術の進歩、大規模經營のための團體の成立・發展は、著しく
阻害された。

この態度が唯一の可能な、云はゞ必然的なものであつたか否かは、大いに問題とし得る。併し、確實なのは、
支那が、これによつて、世界にも例の少い長期間に亘つて自己の存立を維持し、世界最大の同質的な人口集團を
形成したことであり、その限りに於いて相當の合理性を有し、支那人がこれに自信を持ち、外來物たる近代工業
を移植するに同じ態度を以てしたことも、甚だ當然の徑路と云はねばなるまい。支那近代工業の主要特徴、即ち
基礎たる鑛業・重工業が不振で、製造工業、特に、纖維工業を主とする輕工業が重要地位を占める事、小規模の
多數經營が並存する事、工業の經營・企業自體の論理が尊重されず、短期間に利益を收めるための單なる手段と
なり、屢々政治的或は社會的顧慮に制約されること等は、何れも、支那の環境の特徴及び、之に照應した支那人
の性格、支那社會の構造によつて、充分説明し得るのではなからうか。更に、支那環境の特徴たる變化・變動及
びこれに照應する支那人の性格、支那社會の特色ある構造は、漢人の郷土と云ふべき北支に最も顯著で、中南支
に於いてはそれほどでないことは、外國との密接な關係と相俟つて、支那的色彩を帯びてはゐるものゝ、近代工
業が上海その他の中南支諸港市に最もよく發達し、支那に於いて最大の比重を示す理由なのではあるまいか。

要するに、支那近代工業の諸特徴は、支那人の性格、支那社會の構造と共に、支那の自然的・社會的環境に由來するものであり、單に産業革命の歴史が浅いことによると云ふやうな、一時的なものではなく、産業革命が進行してゐないと云ふ事實も、その説明は、單なる時間の長短でなく、やはり上の理由に求むべきものと考へられる。換言すれば、支那近代工業の諸特徴は、その基礎條件が根本的に變化しない限り、容易に變化の期待されない所の、性格と解さるべきものである。

四 結 言

以上、最初に掲げた相關聯する二問題の内、支那に於ける近代工業の主要特徴に關しては、地域的に著しく限定されてゐること、製造工業、特に纖維工業を主とする輕工業が卓越し、一般に資本の有機的組成が低い事、小規模の多數經營が並存すること、經濟的合理主義が甚だ徹底してゐないことを挙げ、第二に、上記の諸特徴は、單に産業革命の歴史が新しいと云ふ時間的關係のみによるものではなく、その有力な原因たる支那人の態度と共に支那の自然的・社會的環境に規定された性格的なものであり、また相當の合理性を有することを述べた。

かやうに考へられるものの、環境に對する適應は決して一に限定されて居らないから、支那に於ける近代工業の實際並に將來につき簡單な斷定は不可能である。この點について特に注意を要する事象に、一口に大規模工業と云つても地域によつて大なる相違のある事、我が在支紡績業を始め、外國系企業が支那人經營のそれとは甚しく趣を異にする事、事變前數年間に支那國民經濟の性格がかなり急激に變化しつゝあつた事、事變による變化等がある。従つて本稿は大體の見當乃至豫想を述べたに止まり、右記諸事實を検討した後、更に補修を加へたい。

京都帝國大學經濟學部内

「東亞經濟研究所」要項 (昭和十五年十一月十日設立)

- 一、東亞經濟研究所ハ東亞經濟ニ關スル研究ヲナスヲ以テ目的トス
- 二、東亞經濟研究所ノ事務所ハ京都帝國大學經濟學部内ニ之ヲ置ク
- 三、東亞經濟研究所ハ左ノ事業ヲ行フ
 - 一、研究雜誌『東亞經濟論叢』ノ發行
 - 二、研究叢書『東亞經濟叢書』ノ發行
 - 三、研究報告『東亞經濟報告』ノ發行
 - 四、研究受託 特殊問題ニ關スル外部ヨリノ研究受託
- 四、其他當所ノ目的ヲ達スルニ必要ナル事業
- 五、東亞經濟研究所ニ左ノ役員ヲ置ク
 - 一、所長 經濟學部部長ニ當ル
 - 二、評議員 經濟學部教授ノ全員ヲ以テ之ニ充ツ
 - 三、主 任 評議員會ニ於テ選定ス
 - 四、編輯委員 評議員會ニ於テ選定ス
 - 五、會計委員 評議員會ニ於テ選定ス
- 六、東亞經濟研究所ニ研究員、助手及囑託ヲ置ク事ヲ得
 - 一、東亞經濟研究所ノ資産及會計ヲ如シ
 - 二、京都帝國大學經濟學會ヨリ受ケタル寄附金ヲ以テ基本財産トス
 - 三、基本財産及事業ヨリ生スル收入並ニ委託研究費ヲ以テ經費ヲ支辨ス
 - 四、會計年度ノ剩餘金ハ之ヲ基本金ニ繰入ル、モノトス
 - 五、役員ハ總テ無給トス
 - 六、毎年度ノ豫算及決算ハ評議員會ニ報告シテ其ノ承認ヲ經ルモノトス
 - 七、東亞經濟研究所ノ事務ヲ左ノ如ク分擔ス
 - 一、庶務
 - 二、會計
 - 三、編輯
 - 四、資料

以上

昭和十六年十二月二十三日印刷
昭和十六年十二月二十八日發行

定價金 壹圓
郵稅九錢

編輯兼
發行人

松尾哲彦
京都市左京區田中里ノ
内町一三

印刷人

橋本岩太郎
京都市上京區上樺木町
通千本東入

印刷所

眞美印刷所
京都市上京區上樺木町
通千本東入

發行所

京都帝國大學經濟學部内
東亞經濟研究所
振替口座京都一九六七四番
日本出版文化協會會員番號第二二〇〇七一號

配給元

日本出版配給株式會社
東京市神田區淡路町
二丁目九番地

發賣所

書肆 有斐閣
東京市神田區神保町
二丁目十七番地
電話九段(33) 〇〇三三三番
振替口座東京三七〇番

價定	一冊 金壹圓		郵稅金九錢	
	四ヶ年	金四圓	郵稅共	
廣告料	一頁	金貳拾五圓		

本誌の購讀會員(一ヶ年分金參圓五拾錢)は東亞經濟研究所(振替口座京都一九六七四番)へ申込まれたし